

# 性役割期待が大学生の自己呈示に及ぼす影響

— ジェンダー・パーソナリティ特性に着目して —

吉 岡 真梨子

(2018年10月4日受理)

Influence of Gender-Role Expectations on University Students' Self-Presentation

— Focus on gender-personality characteristics —

Mariko Yoshioka

**Abstract:** The purpose of this study was to examine the influences of comments including the gender-role expectations on university students' self-presentation. We also examined whether the influence on self-presentation varies depending on the receiver's sex and gender-role view. One-hundred-seventy nine university students (58 male and 121 female students) participated in this study. The participants were divided into eight groups according to sex, experimental conditions on gender-role expectation, and gender-role view. Their self-presentations were measured by M-H-F scale with 3 characteristics of gender-role related to masculinity, humanity and femininity. The main results were as follows: (1) When receiving the traditional gender-role expectation, male students presented masculinity more than did female students. (2) Female students who received the non-traditional gender-role expectation presented more masculinity than did other female students who received the traditional gender-role expectation. (3) When receiving the traditional gender-role expectation, female students presented more femininity than did male students. (4) Male students who received the non-traditional gender-role expectation presented more humanity than did other male students who received the traditional gender-role expectation. (5) When receiving the non-traditional gender-role expectation, male students with high traditional gender-role view presented more humanity than did male students with low traditional gender-role view.

Key words: Gender-Role Expectations, Self-Presentations, Late Adolescence

キーワード：性役割期待，自己呈示，青年期後期

## 問題と目的

本研究は、青年期後期の大学生が、同年代の異性から性役割期待を内包する言葉かけを受けた際、どのようにジェンダー・パーソナリティ特性を呈示するのかを検討するものである。性役割期待を受けた場合、受

---

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：井上 弥（主任指導教員）、山内規嗣、伊藤圭子、児玉真樹子

け手は自らのジェンダー・パーソナリティをどの程度強調、あるいは抑制するのだろうか。多様化が進む社会において、青年の適応的な性役割選択がどのように行なわれるのかを明らかにする。

光元・岡本（2010）は、思春期以降、友人が心理的居場所として機能するようになることを示唆している。同年代のもつ価値観を共有することは、同じコミュニティで生活するうえで大切であり、青年期における性役割学習にも大きな影響を及ぼしているといえる。柏木（1967）によれば、性役割学習には、自分の性に期待されている役割がどのようなものかを認知するこ

と、および、その役割を演ずることの2つの過程が含まれている。これを踏まえると、青年期以降は同年代の性役割期待が内包された言葉かけを認知し、その期待に沿った役割を演じている可能性がある。

伊藤・秋津（1983）は、青年が性役割を習得する過程において、周囲からの役割期待を的確に認知することはひとつの重要な課題ではあるが、その期待に沿った行動をそのままとることが青年の成熟や適応を必ずしも意味するものではないと述べている。言い換えれば、青年の性役割学習においては、役割期待を的確に認知したうえで、主体的な選択にもとづいた役割を呈示することが適応的だといえる。

大学生は一般的に、固定された学級集団に所属する中学生や高校生と比べると、より広く多様な価値観をもつ人との交流をもつことが可能となり、ピア・プレッシャーが薄まっていくことが推測される。また、柏木（1967）の、児童期から青年期にかけて受動的な性役割取得から主体的能動的な性役割学習へと変化が生じるという指摘を踏まえると、青年期後期にある大学生は移行期を経て、より主体的能動的な性役割学習段階に進んでいると考えられる。このことから、性役割期待を受けた場合、自らの性役割観と照らしあわせながら、性役割を選択することが可能となるといえる。

一方で、青年期の恋愛行動をジェンダーの観点から検討した土肥（1995）によると、親密な関係になった青年期後期の男女は、一対一場面において伝統的性役割に沿った行動をとる傾向があることが指摘されている。また、赤澤（2006）も、青年期後期にある女性の女性役割行動が、実際相手である男性の男性役割行動の遂行度を高めていたことなどを示している。本研究は青年期の恋愛行動に着目するものではないが、成人期前期へと移行する前段階であることも考慮すると、異性と一対一という場面における期待や評価は、受け手の性役割特性の呈示に大きな影響を及ぼすと予想される。したがって、性役割期待が内包された言葉かけを受けた場合、受け手は主体的な性役割学習段階にあっても受動的な性役割選択を行なう可能性があるだろう。

他者の抱く役割期待が人の自己呈示行動に及ぼす影響について実験した松本（2002）では、刺激人物である男性が伝統的性役割期待を持つ場合、女性は伝統的な自己呈示を行ない、逆に非伝統的性役割期待を持つ場合は非伝統的な自己呈示を行なうという仮説が立証された。しかしながら、男性においても性役割期待を受けてそれに沿った自己呈示がみられるのかは確認されていない。伝統的な男性役割に対する態度について尺度開発および男女比較を行なった渡邊（2017）は、

男性の方が伝統的な男性役割に縛られていると推察しており、男性も女性と同様に性役割期待の影響を受けていると考えられる。また、松本（2002）では自己呈示を測定する尺度として女性の性役割期待を表す項目を用いており、これらの項目がどのように伝統的女性役割または非伝統的女性役割に対応しているのか明確ではない。男性役割に関する自己呈示の仕方によっては、必ずしも性役割期待に沿った自己呈示を行なっているとは言え切れず、検討の余地があるといえよう。

これまでの関連研究では、松本（2002）のように、実験操作として刺激人物の性役割観や実験参加者の性別を強調した刺激の提示が多くみられる（例えば、Riemer, Chadoir, & Earnshaw, 2014；森永・坂田・古川・福留, 2017）。そのため、実験参加者にとって提示された刺激が性役割期待であることや、その内容が伝統的か非伝統的かを認知しやすくなっていたと考えられる。しかし、日常生活では実験手続きのような明示された性役割期待はほとんど存在せず、送り手の価値観が内包された言葉かけなどによって暗黙のうちに伝えられる性役割期待が多いと考えられる。性役割期待が明示されない場合、受け手の受け取り方によって言葉かけの影響は大きく左右されうる。受容されやすい好意的な言葉で伝えられる性役割期待は、好意的であるがゆえに受け手の受動性を高め、性役割行動を誘導することで青年の適応を妨げている可能性がある。したがって、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけにおいても期待に沿った自己呈示が行なわれるのかを検討する必要があるだろう。

以上を踏まえ、本研究では、青年期後期の大学生男女を対象に、以下の2点を明らかにすることを目的とする。（1）暗黙のうちに伝えられた性役割期待を内包する言葉かけであっても、受け手はその性役割期待に沿ったジェンダー・パーソナリティ特性の呈示を行なうのか、（2）受け手の性別や伝統的性役割観の高さによって、自己呈示に差がみられるのか。なお、本研究では性差を検討するために、便宜的に伝統的性役割と非伝統的性役割を対照的なものとして扱う。すなわち、調査協力者の性別と一致する性別の性役割期待を伝統的性役割期待、一致しない性別の性役割期待を非伝統的性役割期待とする。

人間性（Humanity）が性別に関わらず男女ともに社会から期待される特性であること（伊藤, 1978）や、これまでの研究を踏まえて、本研究では以下のように予想した。

（1）伝統的性役割を期待された場合、男性では男性役割特性の呈示が高まり、女性では女性役割特性の呈示が高まる。（2）非伝統的性役割を期待された場合、

男性では女性役割特性の呈示が高まり、女性では男性役割特性の呈示が高まる。(3) 男女ともに期待される人間性の呈示は、性役割期待の種類や受け手の性別に関わらず高まる。

## 方 法

### 調査協力者

大学生および大学院生179名(男性58名,女性121名)を対象として、質問紙調査を行なった。なお、調査協力者は性別ごとに伝統的性役割条件と非伝統的性役割条件に無作為に割り当てられた。

### 場面設定

場面として、性別ごとに伝統的および非伝統的性役割条件の2種類のストーリーが作成された。導入は条件共通の内容であり、「この春大学へ入学したあなたは、オリエンテーションの一環として、学生間で行われる交流会に参加することになった」とした。

性役割条件操作のため、(a) 刺激人物の紹介コメントと、(b) 刺激人物からペアとなる調査協力者(ストーリー中では“あなた”と表記)へのコメントを以下のように設定した。なお、刺激人物と調査協力者は異性とし、刺激人物の紹介を示すことで、続くコメントを暗黙の性役割期待だと認知できる可能性を高めるよう操作した。

**(a) 刺激人物の紹介コメント** 刺激人物の伝統的あるいは非伝統的性役割を反映するような趣味や刺激人物の長所、異性のペアに期待される性格を、プリント内で紹介する場面とした。伝統的性役割の条件では、刺激人物(Aさん)の性別に一致した性役割(例えばAさんが女性の場合は女性性役割)に沿った趣味や長所が書かれており、ペアにはその性別に一致した性役割特性(例えばAさんが女性の場合は男性性役割)をもつ異性があうという紹介内容である。一方、非伝統的性役割の条件では、伝統的性役割条件とは異なる性別の性役割に沿った刺激人物(Bさん)の趣味や長所、ペアに期待される性役割が書かれている。内容は、BSRI日本語版(東,1990,1991)やM-H-F scale(伊藤,1978)に用いられている性役割語を参考に作成した。男性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の場合、女性Aさんは「趣味;お菓子づくり,長所;サポートやフォローがとくい,自分と息があいそうなタイプ;しっかりした,ひっぱってってくれる男の子」,非伝統的性役割条件の場合、女性Bさんは「趣味;プラモデル作り,長所;てきぱきしている,自己主張ができる,自分と息があいそうなタイプ;温和なやさしい男の子」という紹介がなされている。女性調査協力

者に対しては、伝統的性役割条件の男性Aさんは女性Bさんと同様、非伝統的性役割条件の男性Bさんは女性Aさんと同様の内容である。なお、男性Aさん、男性Bさんにおける「自分と息があいそうなタイプ」では「男の子」の部分のみ「女の子」と言い換えている。

**(b) 刺激人物から調査協力者へのコメント** ペアとなる調査協力者に対して女性性役割を期待し評価するものと、男性性役割を期待し評価するものの2種類のコメントにより、調査協力者に向けられる性役割期待を操作した。刺激人物の紹介と同様にBSRI日本語版(東,1990,1991)やM-H-F scale(伊藤,1978)に用いられている性役割語を参考に作成された。男性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の場合、“あなた”の第一印象を女性Aさんは「積極的で行動力がありそう,頼りになりそう,ひっぱっていってくれそう」,非伝統的性役割条件の場合、女性Bさんは「明るくてやさしそう,気がききそう,相手の立場に立って考えてくれそう」といった3つのコメントが各条件でなされている。女性調査協力者に対しては、伝統的性役割条件の男性Aさんは女性Bさんと同様、非伝統的性役割条件の男性Bさんは女性Aさんと同様の内容である。なお、すべての条件において、この調査協力者へのコメントには(a) 刺激人物の紹介コメントにおけるペアに期待される性役割(ストーリー上では「自分と息があいそうなタイプ」)に提示された性役割語の一部が含まれているが、完全に一致するものではない。

### 調査内容

**ジェンダー・パーソナリティ特性呈示の測定** M-H-F scale(伊藤,1978)から25項目(Masculinity 9項目,Humanity 6項目,Femininity 10項目)を用いて7件法で測定した。なお、暗黙の性役割期待を内包する言葉かけによる影響をみるため、pre/postの2回、測定を行なった。postの測定では、教示文を「ストーリーを読んで、あなたはA/Bさんに対して、自分自身をどのような人間に見てもらいたいと考えていますか?」とした。

**伝統的性役割観の測定** 性差観スケール(伊藤,1997)30項目から15項目を用いて、4件法で測定した。得点が低いほど、性役割に対して平等主義的な態度をもち、伝統的性役割観をもっていないと考えられる。なお、測定のタイミングはジェンダー・パーソナリティ特性呈示のpost測定後である。

### 倫理的配慮

調査するにあたり、結果は研究のみに使い、個人は特定されないこと、不快に感じた場合は途中で回答を止めて構わないことなどを質問紙に明記し、事前説明

を行なった。加えて回答後には、調査内容についてデブリーフィングを行なった。

## 結 果

### 信頼性の検討

本調査において用いたジェンダー・パーソナリティ特性呈示の Masculinity 9項目, Humanity 6項目, Femininity 10項目, 伝統的性役割観の15項目それぞれについて、信頼性を確認するために内的一貫性を検討した。その結果、Masculinity 項目の  $\alpha$  係数は .89, Humanity 項目の  $\alpha$  係数は .75, Femininity 項目の  $\alpha$  係数は .77, 伝統的性役割観項目の  $\alpha$  係数は .81の値を示し、信頼性が確認された。したがって、以降の分析において Masculinity 項目の平均得点は伝統的な男性役割特性を呈示する得点 (M 呈示得点), Femininity 項目の平均得点は伝統的な女性役割特性を呈示する得点 (F 呈示得点) とし, Humanity 項目の平均得点は性別に関わらず男女ともに社会から期待される特性を呈示する得点 (H 呈示得点) とした。

### 群ごとの平均値および標準偏差

伝統的性役割観の高さによって群分けを行なうため、伝統的性役割観得点において調査協力者の性別による差がみられるかを  $t$  検定により確認した。その結果、有意差はみられなかった。したがって、男女込みの平均値に基づき伝統的性役割観 High 群, Low 群に群分けした。分析にあたり、Table 1に示したように、調査協力者の性別および性役割条件、伝統的性役割観 HL を組合せた 8 群における各得点の平均値および標準偏差を算出した。

### 男性役割特性の呈示

M 呈示得点について、pre/post  $\times$  性別  $\times$  性役割条件  $\times$  伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行なった。その結果、pre/post の主効果が有意であり ( $F(1, 171) = 23.88, p < .001, \eta^2 = .12$ )、post のほうが pre よりも M 呈示得点が高かった。伝統的性役割観 HL の主効果にも有意差がみられ ( $F(1, 171) = 7.08, p < .01, \eta^2 = .04$ )、伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも M 呈示得点が高かった。

また、性役割条件  $\times$  伝統的性役割観 HL における交互作用 ( $F(1, 171) = 4.18, p < .05, \eta^2 = .02$ ) が有意であった。下位検定を行なったところ、Figure 1にみられるように、伝統的性役割観 H 群において非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 171) = 8.72, p < .01$ )、非伝統的性役割条件において伝統的性役割観 H 群のほうが伝統的性役割観 L 群より ( $F(1, 171) = 12.22, p < .01$ ) M 呈示得点有意に高かった。

さらに、pre/post  $\times$  性別  $\times$  性役割条件における 2 次の交互作用 ( $F(1, 171) = 5.32, p < .05, \eta^2 = .03$ ) においても有意差がみられた。下位検定を行なったところ、post における性別  $\times$  性役割条件 ( $F(1, 175) = 12.15, p < .01$ )、女性における性役割条件  $\times$  pre/post ( $F(1, 175) = 7.95, p < .01$ )、伝統的性役割条件における性別  $\times$  pre/post ( $F(1, 175) = 7.08, p < .01$ ) の単純交互作用が有意であった。Figure 2にみられるように、post において、伝統的性役割条件では男性のほうが女性より ( $F(1, 175) = 10.16, p < .01$ )、女性では非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 175) = 14.25, p < .001$ ) M 呈示得点有意に高かった。また、伝統的性役割条件において、post では男性のほうが女性より ( $F(1, 175) = 10.87, p < .01$ )、男性では post のほうが pre より ( $F(1, 175) = 10.47, p < .01$ ) M 呈示得点有意に高かった。非伝統的性役割条件においては、女性において post のほうが pre より ( $F(1, 175) = 21.29, p < .001$ ) M 呈示得点有意に高かった。女性において、post では非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 175) = 14.24, p < .001$ )、非伝統的性役割条件では post のほうが pre より ( $F(1, 175) = 21.29, p < .001$ ) M 呈示得点有意に高かった。

### 女性役割特性の呈示

F 呈示得点について、pre/post  $\times$  性別  $\times$  性役割条件  $\times$  伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行なった。その結果、伝統的性役割観 HL の主効果が有意であり

Table 1 群ごとの各得点の平均値と標準偏差

		伝統的性 役割観	pre M 呈示	pre F 呈示	pre H 呈示	post M 呈示	post F 呈示	post H 呈示
男性	伝統的性 役割条件	2.44 (0.46)	3.00 (1.02)	2.89 (0.43)	3.20 (0.70)	3.68 (0.88)	2.79 (0.50)	3.56 (0.68)
	性役割観	1.75	2.92	2.76	3.17	3.83	2.40	3.79
	L (n=16)	(0.30)	(0.80)	(0.39)	(0.50)	(0.76)	(0.78)	(0.66)
	非伝統的性 役割条件	2.36 (0.23)	3.44 (0.92)	2.72 (0.54)	3.81 (0.96)	3.91 (1.14)	2.73 (1.13)	4.34 (1.01)
女性	伝統的性 役割条件	2.45 (0.23)	3.15 (0.82)	2.88 (0.67)	3.42 (0.57)	3.25 (0.96)	3.11 (0.87)	3.94 (0.97)
	性役割観	1.65	2.95	2.51	3.14	3.10	2.76	3.72
	L (n=34)	(0.29)	(0.95)	(0.81)	(0.85)	(1.08)	(0.98)	(0.91)
	非伝統的性 役割条件	2.29 (0.17)	3.08 (0.96)	2.63 (0.61)	3.18 (0.78)	4.13 (0.93)	2.60 (0.77)	4.05 (0.55)
女性	伝統的性 役割条件	1.64 (0.28)	3.08 (1.01)	2.64 (0.73)	3.29 (0.77)	3.46 (0.90)	2.65 (0.72)	3.70 (0.74)
	性役割観	1.64	3.08	2.64	3.29	3.46	2.65	3.70
	L (n=24)	(0.28)	(1.01)	(0.73)	(0.77)	(0.90)	(0.72)	(0.74)
	非伝統的性 役割条件	1.64	3.08	2.64	3.29	3.46	2.65	3.70

注) ( )内はSDを示している。

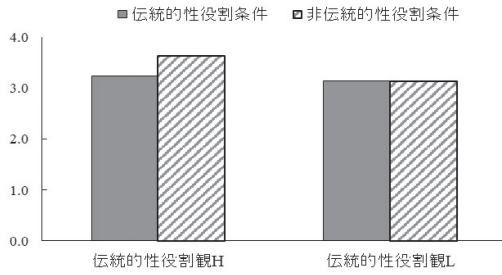


Figure 1 M 呈示における 1 次の交互作用

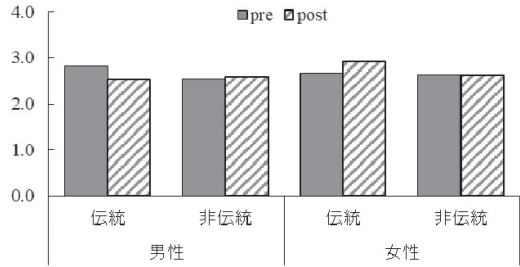


Figure 3 F 呈示における 2 次の交互作用

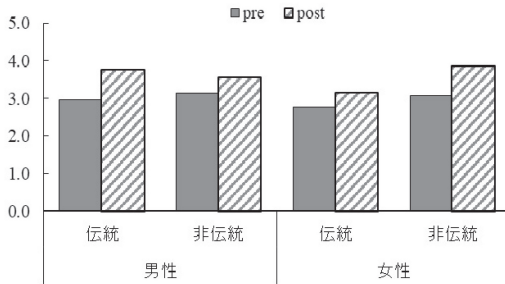


Figure 2 M 呈示における 2 次の交互作用

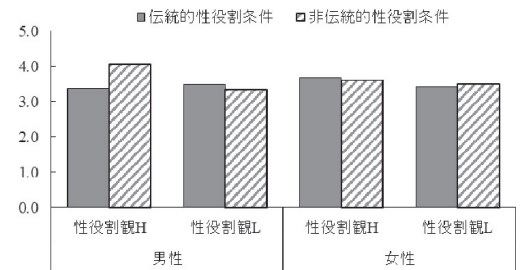


Figure 4 H 呈示における 2 次の交互作用

( $F(1, 171) = 5.18, p < .05, \eta^2 = .03$ ), 伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも F 呈示得点が高かった。

また、pre/post × 性別 × 性役割条件における 2 次の交互作用 ( $F(1, 171) = 4.18, p < .05, \eta^2 = .02$ ) においても有意差がみられた。下位検定を行なったところ、伝統的性役割条件における性別 × pre/post ( $F(1, 171) = 7.56, p < .01$ ) の単純交互作用が有意であった。Figure 3 にみられるように、伝統的性役割条件において、post では女性のほうが男性より ( $F(1, 171) = 5.34, p < .05$ )、女性では post のほうが pre より ( $F(1, 171) = 5.82, p < .05$ ) F 呈示得点有意に高かった。

#### 人間性特性の呈示

H 呈示得点について、pre/post × 性別 × 性役割条件 × 伝統的性役割観 HL の 4 要因分散分析を行なった。その結果、pre/post の主効果が有意であり ( $F(1, 171) = 48.33, p < .001, \eta^2 = .22$ )、post のほうが pre よりも H 呈示得点が高かった。伝統的性役割観 HL の主効果においても有意差がみられ ( $F(1, 171) = 5.65, p < .05, \eta^2 = .03$ )、伝統的性役割観 H 群のほうが L 群よりも H 呈示得点が高かった。

また、性別 × 性役割条件 × 伝統的性役割観 HL における 2 次の交互作用においても有意差がみられた ( $F(1, 171) = 5.23, p < .05, \eta^2 = .03$ )。下位検定を行なったところ、男性における性役割条件 × 伝統的性役割観 HL ( $F(1, 171) = 7.08, p < .01$ )、伝統的性役割観 H 群における性別 × 性役割条件 ( $F(1, 171) = 4.44,$

$p < .05$ ) の単純交互作用が有意であった。Figure 4 にみられるように、男性において、非伝統的性役割条件では伝統的性役割観 H 群のほうが L 群より ( $F(1, 171) = 12.00, p < .01$ )、伝統的性役割観 H 群では非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 171) = 11.24, p < .01$ ) H 呈示得点有意に高かった。また、伝統的性役割観 H 群において、男性では非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件より ( $F(1, 171) = 11.22, p < .01$ ) H 呈示得点有意に高かった。

#### 考察

本研究では、青年期後期の大学生男女を対象とし、性役割期待がジェンダー・パーソナリティ特性の呈示へ及ぼす影響を検討した。次の 2 つの目的に沿って、特性ごとに考察を行なうこととする。(1) 暗黙のうちに伝えられた性役割期待を内包する言葉かけであっても、受け手はその性役割期待に沿ったジェンダー・パーソナリティ特性の呈示を行なうのか、(2) 性別や伝統的性役割観の高さによって、自己呈示に差がみられるのか。

#### 男性役割特性の呈示

伝統的な男性役割特性の呈示においては、pre/post × 性別 × 性役割条件における 2 次の交互作用がみられた。下位検定の結果にもとづいて考察していく。性役割期待を受けた後、伝統的性役割条件では男性のほう

が女性より男性役割特性を呈示していた。これは、男性の伝統的性役割条件では男性役割を期待されていたのに対し、女性の伝統的性役割条件では女性役割を期待されていたことを反映した結果であり、予想と一致していた。したがって、目的の(1)に関しては、暗黙のうちに伝えられた性役割期待を内包する言葉かけであっても、男性役割特性についてはその期待に沿った呈示を行なうことが示唆された。

しかし、期待に沿った呈示という効果ならば、男性役割を期待された女性の非伝統的性役割条件と、女性役割を期待された男性の非伝統的性役割条件の間にも差がみられるはずだが、有意差は確認されなかった。性別ごとに、性役割期待を受けた後の性役割条件の効果を確認すると、女性では男性役割を期待されている条件のほうがより男性役割特性を呈示しており、予想と一致する結果がみられた。それに対して、男性では性役割条件間で差がみられず、予想と一致しない結果となっていた。これらの結果をあわせて考察すると、男性は女性に比べ、女性役割特性を期待された場合でも、期待されていない男性役割特性を呈示することが示唆されたといえる。

伝統的な男性役割に対する態度について尺度開発および男女比較を行なった渡邊(2017)は、男女を比較すると依然として男性の方が伝統的な男性役割に縛られていると推察し、男性が男性役割から逸脱することは、女性が女性役割から逸脱するよりも社会的な罰が大きい(Moss-Racusin, Phelan, & Rudman, 2010)ことを理由に挙げている。本研究においても、男子大学生は期待に関わらず伝統的な男性役割特性を重視しており、男性役割に縛られていることが確認された。目的に照らし合わせて整理すると、女性役割特性を期待された場合においては、性別によって、男性役割特性の呈示の程度に差がみられることが明らかになったといえる。

目的(2)に関する伝統的性役割観の高さによる呈示の差については、性役割条件×伝統的性役割観HLにおける1次の交互作用の結果から考察したい。伝統的性役割観が高い群のみ、非伝統的性役割条件のほうが伝統的性役割条件よりも男性役割特性を呈示していた。また、非伝統的性役割条件において、伝統的性役割観の高い群が低い群より男性役割特性を呈示していた。このことから、伝統的性役割観が高いほど、性役割期待の種類によって呈示に影響を受けやすいといえる。なお、特に有意な結果がみられた非伝統的性役割条件における伝統的性役割観の影響についての考察は、男女で期待されるジェンダー・パーソナリティ特性が一致していないため、目的(2)の性差と関連さ

せて考察を行なっていく。

伝統的性役割観が高い男性は、社会的に望ましい男性は伝統的な男性役割特性をもつというイメージを確立していると予想される。しかし、非伝統的性役割条件で期待された女性役割特性は、そのイメージと一致しないものである。そのため、あえて自らの性別と一致する男性役割特性を呈示し、送り手へ与える印象を操作しようとした可能性が考えられる。したがって、伝統的性役割観が高い男性は判断基準を明確にもっているために、主体的なジェンダー・パーソナリティ特性の呈示を行ないやすいといえるだろう。

一方で、女性については、この考察が当てはまらない。伝統的性役割観が高ければ、社会的に望ましい女性は伝統的な女性役割特性をもつというイメージを確立しているはずであり、期待された男性役割特性はそのイメージに一致しない。それにもかかわらず、伝統的性役割観が高い人のほうが低い人よりも期待された男性役割特性の呈示を行なっていたという結果は何を示唆しているのだろうか。M-H-F scale(伊藤, 1978)を用いて現代の大学生の性役割認知を検討した後藤・廣岡(2003)は、一般的に社会で重要とされる特性の評価において、男女ともにHumanity, Masculinity, Femininityの順に高い評価を与えており、Femininityには極端に低い価値を与えていることを明らかにしている。また、彼らは一般に女性にとって重要とされる特性の認知についても検討しており、女性はこれまで男性役割とされてきた特性を積極的に女性役割に取り入れて、社会的により望ましい女性役割を作り上げていることを明らかにしている。これらを踏まえると、非伝統的性役割条件においてみられた伝統的性役割観の高さによる差は、各ジェンダー・パーソナリティ特性に対して明確な評価、判断基準をもっているか否かにより生じたものであるといえる。すなわち、伝統的性役割観が高い女性は、自らの性別と一致しない男性役割特性を新たな女性役割特性として取り込んでおり、伝統的性役割観が低い女性よりも主体的かつ積極的に男性役割特性の呈示を行ないやすかったと考えられる。

#### 女性役割特性の呈示

伝統的な女性役割特性の呈示においても、pre/post×性別×性役割条件における2次の交互作用がみられた。下位検定の結果にもとづいて考察していく。伝統的性役割条件で性役割期待を受けた後、女性のほうが男性よりも女性役割特性を呈示していた。これは、男性役割特性の呈示においてみられた結果と同様に、性役割期待の種類を反映した結果といえる。また、伝統的性役割条件の女性では、女性役割特性を期待する言

言葉かけを受けた後のほうが受ける前よりも、女性役割特性の呈示得点が高かった。この結果は予想と一致しており、目的の(1)に関しては、暗黙のうちに伝えられた性役割期待を内包する言葉かけを受けると、特に女性はその期待に沿って女性役割特性を呈示することが示唆された。

しかし、男性役割特性呈示の結果と同様に、非伝統的性役割条件で期待を受けた後の女性役割特性呈示は、性差がみられなかった。また、男性では非伝統的性役割条件において女性役割特性を期待する言葉かけを受けても、その前後で女性役割特性の呈示に差がみられなかった。これらの結果は予想と一致しておらず、目的の(2)に関する性差として、男性は女性に比べ、女性役割特性を期待された場合でも、女性役割特性の呈示に影響を受けにくく、女性役割特性を呈示しないことが示唆された。先に述べた、男性は伝統的な男性役割に縛られており、逸脱に対し社会的な罰が大きいことや(渡邊, 2017; Moss-Racusin, Phelan, & Rudman, 2010)、一般的に社会で重要とされる特性の評価においてFemininityには極端に低い価値が与えられていること(後藤・廣岡, 2003)が、男性の女性役割特性呈示に影響していると考えられるだろう。

#### 人間性の呈示

本研究では、ジェンダー・パーソナリティ特性の一つとして人間性にも着目した。本研究においては性役割条件として性役割期待を伝統的か非伝統的かの2条件になるよう操作したため、人間性の期待は含まれていない。したがって、目的の(1)暗黙のうちに伝えられた性役割期待を内包する言葉かけであっても、受け手はその性役割期待に沿ったジェンダー・パーソナリティ特性の呈示を行なうのかについては、人間性の結果のみで考察できない。そこで、「男女ともに期待される人間性の呈示は、性役割期待の種類や受け手の性別に関わらず高まる」という予想に対する結果や、男性役割特性や女性役割特性の呈示についての考察とあわせつつ、人間性の呈示の果たす役割について考察を行なうこととする。

人間性の呈示においては、予想と異なり、性別×性役割条件×伝統的性役割観 HL における2次の交互作用がみられた。下位検定の結果にもとづいて考察していく。伝統的性役割観が高い男性は、男性役割特性を期待されるよりも女性役割特性を期待されたほうが、人間性を呈示していた。また、男性が非伝統的性役割条件で女性役割特性を期待された場合、伝統的性役割観の高い群が低い群よりも人間性を呈示していた。このことから、人間性の呈示はどのような場合でも積極的に選択されるわけではなく、印象操作を行なううえで

重要な役割を果たしている可能性が高いと考えられる。

男性役割特性の呈示でみられた結果をあわせて考察すると、伝統的性役割観が高い男性は、女性役割特性を期待された場合、自らのもつ性役割観と一致しない期待を受けることになる。そこで、受容しがたい女性役割特性の呈示ではなく、自らの性別と一致する男性役割特性を呈示することで送り手へ与える印象を操作しようと試みる可能性が高い。しかし、その場合、自らの望むジェンダー・パーソナリティを示すことに成功する一方で、送り手の期待に沿うことはできなくなってしまうことが予想される。このような状況に対し、伝統的性役割観が高い男性は次善策として、人間性の呈示を行なったのではないだろうか。男性役割特性や女性役割特性のどちらにも属さないが、社会的に望ましい人間性を呈示することは、送り手の期待が伝統的、非伝統的のどちらであってもネガティブな評価を受けにくいと考えられる。予想と異なり性役割期待の種類によって差がみられたが、この結果は受け手の望むジェンダー・パーソナリティと、送り手の性役割期待とのバランスをとるために、人間性が重要な役割を果たしていることを示唆するものであったといえるだろう。

他方で、上記のような結果は男性にのみ確認されたものであり、女性については有意差がみられなかった。男性役割特性や女性役割特性の呈示でみられた結果を踏まえると、女性は男性に比べ、送り手の性役割期待に対して受容的であり、伝統的、非伝統的に関わらずその期待に沿ったジェンダー・パーソナリティ特性を呈示しているといえる。そのため、人間性の呈示によって送り手の期待とのバランスをとる必要がなく、どの群においても一定の人間性を呈示していたと考えられるだろう。

#### まとめ

本研究は、青年期後期の大学生が、同年代の異性から性役割期待を内包する言葉かけを受けた際、どのようにジェンダー・パーソナリティ特性を呈示するのかを検討するものであった。

結果から、主体的能動的な性役割学習段階にあると考えられる青年期後期の女子大学生においても、送り手の性役割期待に沿うようなジェンダー・パーソナリティ特性の呈示を行なうことが明らかになった。しかし、女子大学生は、非伝統的な性役割期待を受けた場合もその期待に沿う呈示を行っていたことから、伝統的な女性役割に縛られているわけではなく、男性役割特性に対しても受容しているといえよう。ジェン

ダー・パーソナリティ特性におけるそれぞれの境界が薄まりつつあるのかもしれない。また、女子大学生は相手の期待に応えること自体を重視していた可能性があるため、周囲が伝統的な女性役割を期待する環境では、結果的に伝統的な女性役割観が強化され、再生産が行なわれてしまう危険性もある。

これに対し、男子大学生は伝統的な男性役割に縛られていることが示唆された。特に、非伝統的な女性役割期待を受けた場合には、女性役割特性を強めて呈示せず、伝統的な女性役割を期待された場合と同程度男性役割特性について呈示していると解釈された。これは男子大学生が女性役割特性を受容していないことを示唆しており、男性の中に伝統的な男性役割が根強く残っていることを示すものである。その一方で、伝統的な女性役割観をもつ男子大学生は、人間性を呈示することによって、受け手の望むジェンダー・パーソナリティと、送り手の性役割期待とのバランスをとっていることが明らかとなった。性役割期待を的確に認知したうえで、主体的な選択にもとづいた役割を呈示することが適応的な性役割学習であるならば、人間性を呈示することでバランスをとろうとすることは適応的だといえる。

本研究では人間性を含めたジェンダー・パーソナリティの3特性に着目し検討を行なったことで、人間性の呈示が青年の適応に重要な役割を果たす可能性が示唆された。このことから、今後は性役割期待を受けた際に人間性を呈示することで、不安が低減するなどのポジティブな影響がみられるのか、人間性の呈示が適応に及ぼす影響についても詳細を検討していく必要があるだろう。

最後に、本研究で使用した性役割条件は先行研究(例えば東, 1990, 1991; 伊藤, 1978)を踏まえ、伝統的または非伝統的な性役割を提示しているという前提のもとに作成されたが、性役割は不変のものではなく時代によって伝統・非伝統、男性役割・女性役割を構成する特性は変化していくと考えられる。また、性役割特性に対する伝統性の認知は、個人によって少しずつ異なっており、厳密に伝統的な性役割や非伝統的な性役割といった条件設定を行なうには限界がある。今後、個人内要因による影響も踏まえた現在の性役割語の認知についての検討を行なうことで、可能な限り時代による変化や認知における個人差が少ない刺激の作成が望まれる。

## 【引用文献】

赤澤淳子 (2006). 青年期後期における恋愛行動の規定因について: 関係進展度, 恋愛意識, 性別役割の

自己認知が恋愛行動の遂行度に及ぼす影響. 仁愛大学研究紀要, 5, 17-31.

東 清和 (1990). 心理的両性具有 I: BSRI による心理的両性具有の測定. 早稲田大学教育学部学術研究: 教育・社会教育・教育心理・体育学編, 39, 25-36.

東 清和 (1991). 心理的両性具有 II: BSRI 日本語版の検討. 早稲田大学教育学部学術研究: 教育・社会教育・教育心理・体育学編, 40, 61-71.

土肥伊都子 (1995). 性役割分担志向性・実行度および愛情・好意度に及ぼす性別とジェンダー・パーソナリティの影響. 関西学院大学社会学部紀要, 73, 97-107.

後藤淳子・廣岡秀一 (2003). 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化. 三重大学教育学部研究紀要, 54, 145-158.

伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究. 教育心理学研究, 26, 1-11.

伊藤裕子 (1997). 高校生における性差観の形成環境と性役割選択: 性差観スケール (SGC) 作成の試み. 教育心理学研究, 45, 396-404.

伊藤裕子・秋津慶子 (1983). 青年期における性役割観および性役割期待の認知. 教育心理学研究, 31, 146-151.

柏木恵子 (1967). 青年期における性役割の認知. 教育心理学研究, 15, 193-202.

松本芳之 (2002). 役割期待が自己呈示行動に及ぼす影響: 性役割期待と成功回避. 早稲田大学大学院文学研究科紀要: 第1分冊 哲学東洋哲学心理学社会学教育学, 48, 39-52.

光元麻世・岡本祐子 (2010). 青年期における心理的居場所に関する研究: 心理社会的発達の見点から. 広島大学心理学研究, 10, 229-243.

Moss-Racusin, C. A., Phelan, J. E., & Rudman, L. A. (2010). When men break the gender rules: Status incongruity and backlash against modest men. *Psychology of Men and Masculinity*, 11, 140-151.

森永康子・坂田桐子・古川善也・福留広大 (2017). 女子中高生の数学に対する意欲とステレオタイプ. 教育心理学研究, 65, 375-387.

Riemer, A., Chaudoir, S., & Earnshaw, V. (2014). What looks like sexism and why? The effect of comment type and perpetrator type on women's perceptions of sexism. *The journal of general psychology*, 141, 263-279.

渡邊 寛 (2017). 伝統的な男性役割態度尺度の作成と信頼性・妥当性の検証. 心理学研究, 88, 488-498.